

### センターに向かって進め その3

センター試験はあくまで、相対的な試験である。絶対的に設定した目標点数はそれはそれ。実は平均点からどれくらい上回るか、二次試験の逆転は可能か、逃げ切り率は高いかという検証になるのである。自己採点後の検証によって、己の戦略を立てることが第一である。

だから、センター試験は一つのハードルなのである。逆に、センター試験は一つのハードルでしかないのである。翻ってみれば、センター試験をいくら頑張っても、550点中の110点分の意味でしかない大学もあれば、900点満点中780点以上の点数があると、間違いなく合格するセンター併願の推薦試験や、AOⅢ期の試験もあるのである。

さらに言うと、センター併願の私大の募集の出願申し込みは、ほとんどが、1月16日までの出願であり(早いところはもうすでに終わっている)、滑り止めを抑えるためには、その私大への申し込み人数と、センタープレテスト模擬試験の結果から予想される合格ランキング等の資料を照らし合わせ、ここだけは絶対合格するということを抑えておくと、前期試験や私立大学での第一志望校への挑戦が楽になってくるのである。

センター試験後の動きは、自己採点からの三者面談までの保護者と当人との綿密な打ち合わせと、三者面談における担任との戦略の確認、速やかな判断と前期試験中期試験後期試験一緒の出願を行い(ここを間違わないことが肝要)、それから、センター後の課外への出席と約一か月の受験までの計画を立て、教科ごとの戦略を生かしながら進むのである。

これらは、自分の力で行わなければならない。決して、塾の指導をうのみにしたり、担任等に任せっきりではいけない。自分から自分の道を切り開くのである。

県北の学校では、クラスのほとんどが2月中も出席し、朝7:00から夜19:00まで学校でこの学習を継続する。その後、そのまま、塾の自習室等で22:00ぐらいまで復習に徹し、家に帰ってから、午前1:00過ぎまでもう一度復習する。この学習を丸々一か月行いながら、小論文指導を含めて、福島大学への合格を遂げていくのである。

仮に、福島大学を茨城大学にすれば、磐城高校の進路指導部には相当量の情報が蓄えられている。また、それぞれの大学への指導について、東大、東工大、東北大、北海道大、一橋大の実績を持った教員がいるのであるから、ここは密着指導をお願いすべきである。

特に、数学の二次対策については、中高一貫校が全国的に進出していることから、問題が難化傾向にあるので、決して見くびらず、様々な対策を取っていくべきである。(明日へ続く)